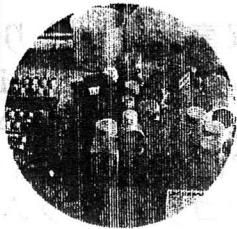


医療PKOで「奮戦」

信頼厚いアジア医師連

国連の平和維持活動（PKO）が本格化するカンボジアでは、国際赤十字会が活動が盛んだ。プノンペン南西約五十キロのコンボンスア県プノムスロイ地区病院で地域医療を支えるアジア医師連絡協議会（本部・岡山市）の高橋央（ひろし）さん（三〇）もその一人だ。



「この男の子は患性のマラリア。キニーネの大剂量で与え持たせたが、むくみがひどい」
病棟とは名ばかりの板壁に土間の小屋。ぶき一枚を敷いただけのベッドに横たわるサイ・ポティちゃん



カンボジアの子供を診療する高橋央医師。点滴の支柱も竹サオだ。右はテーブルの上に並べられた医療品のすべて（コンボンスア県のプノムスロイ地区病院で、安原稔撮影）

ジャマイカから大阪の会社員の家に手紙が届いた。中米に行ったこともないし、知り合いもないが、あて先は確かに自分になっている。首をかきながら封を切った。

差出人は、エルサルバドルの内戦で夫を失った二十九歳の女性と自己紹介。スペイン語にもかかわらず、しっかりと英文で書いてある。かなりの教養を受けたようだ。

戦火を逃れて
なぜのSOSで
品を売
いつな
う。そ
件が記
ハス
保の仕

戦火を逃れて、しまつと、四歳のジャマイカまででお金が底をついた。品を売って、いつなう。その件が記しては、渡航費、十五ドルを送って、しょうか

「このほおをなでた。付き添う父、ヨンさん（八）は「一か月間に村では十人も死んだ。妻も発病したが、十時、財も離れていて運んで来れない」と訴える。「この国は今、滑走路を疾走する飛行機。でも離陸後はカンボジア人にまかさないければ。ポストPKOを見据え、高価な薬や設備を必要最低限に絞るのも大切」と、高橋さん（三〇）も力強く訴える。

医師不在で十二年間、患者が来なかったこの病院に四十人が通つようになった。「日ごと増える患者の数は信頼の厚さ。一人でも多く助けてほしい」。病院事務職員のアフ・サモエンさん（三三）の言葉は住民の祈りでもある。

医師不在で十二年間
テーブルにあるだけの薬を広げた。